

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

レオナルド・ダ・ヴィンチという人がいる。皆さんの誰もが知っているあのモナリザの作者でもある。画家でもあり、また詩人でもあり、思想家でもあり、あるいは科学者でもあった。僕がレオナルド・ダ・ヴィンチの名を知ったのは今から六十年程前で太平洋戦争が終わったばかりの小学二年生の時だった。

ある時先生が黒板にレオナルド・ダ・ヴィンチと大きく書き、こんな話をして下さった。ダ・ヴィンチという人は、僕たちの未来についていろんなことを語っている。近未来の社会をいろいろと思い描いている。その中で、ダ・ヴィンチは「人間がA地点からB地点に移動するための乗り物は馬が一番良い」と言っていた。たしかにダ・ヴィンチの時代には、多くの人は歩いて旅をすることしかできなかった。馬の背に乗って荒野や砂漠を進んでいくというのは①大変なスピードだったろうと想像できる。

しかし、②ダ・ヴィンチともあろうう人が車社会や空飛ぶ飛行機を考えなかったはずがない。でもなぜか、ダ・ヴィンチは馬が一番と言った。「さすがのダ・ヴィンチも昔の人だなあ、やっぱり③人間はその時代から逃れることができないんだなあ」と小学生の僕は思った。ところが心のどこかに残ったダ・ヴィンチの一言がある。「なぜならばそれが人間にとって一番幸せなスピードであるからだ。」その一言がずっと僕の記憶の中に残っていた。

それから十年、二十年経って僕は大人になった。今の時代はどこへ行くにしても、車、飛行機を使う。便利で快適になり、スピードアップした。時間の無駄遣いもなくなり、効率の良い時代になった。でも、その時いつも僕は思う。僕たちは人間にとって一番幸せなスピードで過ごしているのだろうか。ダ・ヴィンチは馬のスピードが一番幸せだと言った。だとしたら、④僕たちは不幸な暮らしをしているのではないか。そう考えてみると、たしかにそういう部分がある。僕は自分を不幸にしないために、飛行機に乗って時間を節約した分をいかに豊かに使うかということを考える。

例えば、映画を作るには撮影後にフィルムを編集する。その作業は一ヶ月も二ヶ月も、映画によっては半年も一年もかかる。フィルムをワンカットずつ、カットで切って、それを削り、糊をつけて貼りあわせていく。失敗したら、それを剥がしてまた貼りあわせていく。その後、少しでも便利になって、テープスライサーというものでaセツチャクをするようになったので、時間がだいぶ節約できるようになった。とはいえ、やはりこれも手仕事である。

それが現代ではコンピュータの時代である。コンピュータ制御の機械の中にフィルムを放り込むと、映像という情報になり、ボタンをポンと押すだけで、カットがつながっていく。失敗したら、またポンと押し直すだけでよい。だからかつての時代の三分の一ほどの時間で仕事が進むようになった。それはとても素晴らしいことである。文明のbリキのおかげとはこういうことだ。

けれども三分の一の時間で済むようになったのだから、残りの三分の二の時間は自分の好きな本を読んだり、音楽を聴いたり、絵を描いたり、あるいは親しい友達と会ったり、旅をしたり、そのような豊かな幸福な時間に使えるのなら素晴らしいのだが、なかなかそうはいかない。僕の友達達の編集マンは、編集時間が三分の一の時間で済むようになったために、仕事が三倍に増えてしまったという。仕事が三倍に増えるということ自体は、商品を作るという面からは良いことなのかもしれない。つまり経済効率が良いということだ。でも、そのために人間の体も三倍消費されていく。体も心も疲れて幸福を失っていく。⑤人間がロボットに、更にいえば科学の奴隷になっていくわけである。これではせっかく人々に夢を語る映画を作るという仕事が、逆に人間を不幸にする仕事になってしまふ。

ダ・ヴィンチが言った幸福というものについてそこから考えることができる。かつて人は馬に乗って旅をした。たしかに時間はかかる。不便も多い。けれども、その旅の中で、人と出会って話をしたり、色んな場所で行くんな食べ物を食べたり、あるいは日が照ったり、雨に降られたり、暗い夜があったり、星の輝きを見たり、風に吹かれたり、そういういろいろなことが旅をする人の人生の中に、心のなかにどれだけ豊かな幸福感をもたらしてくれただろうかということを思い起こさなければならぬ。ダ・ヴィンチの言葉はAにこそ意味を持つのだと僕は今思う。ダ・ヴィンチは彼にとっての遥かなBである今のこの時代を思いやっていたのではないか。未来とは地球の明日を生きる人たちの時代であるということを考えてすれば、芸術の力は未来の人間の幸福を予測する力、そしてそ

れを予測したがゆえに、どんどん便利快適ということに流されていく、僕たちの暮らしを⑥、そういう力にもなる。そこに芸術というものの素晴らしさがあるのではないかと思う。(中略)

芸術が美しさを持つということはどういうことか。これも僕が小学生の時のことである。僕の故郷の広島県のとりの山口県に錦帯橋という橋がある。五つの丸い太鼓橋、絵のような美しい橋である。僕たちは汽車に乗ってよくこの橋を写生しに行った。その橋を写生しながら僕はふと不思議に思ったことがあった。それで先生にこう聞いた。

「橋はこちらの岸から向こうの岸へ人を渡すもの。二つの場所を結ぶもの。より便利により快適に、よりはやく渡ることが出来るもの。雨が降っても風が吹いても、橋を渡れば、誰かに会いに向こう岸までいける。そのために作られた橋が、どうしてこんなに渡りにくいのでしょうか。雨が降ったらツルツル滑り、日照りの日には汗をかく、本当に渡りにくいこんな橋をどうして作ったのでしょうか。」すると、先生がにっこり笑ってこう答えて下さった。

「たしかに君の言う通りだ。けれどもいざ橋ができてしまうと人間は便利さや快適さの奴隷となって橋のありがたさをすぐに忘れてしまう。⑦それが当たり前になってしまふ。そうすると川や海にゴミを投げる。川の向こうの人と互いに持っている友情や礼儀を忘れてしまふ。二つの場所の人が出会うという喜びを忘れて争いすらおきてしまふ。橋は凶器にもなってしまう。そういう人間が、おろかに間違いを犯すことがないために、いつもありがとうという気持ちをおぼれないうために、この橋は渡りにくくできていくんだよ。」と。

渡りにくい橋を我慢して渡る時、昔は雨の日には渡れなかった、風の強い日には渡ることができなかったと考える時間を、この不便な橋は与えてくれている。⑧この橋もダ・ヴィンチと同じ考えを持っている。先生は最後にこう言った。「大林君、だからこの橋はこんなに美しいだろう」と。芸術作品の美を生む力とは、便利である、あるいは効率が良い、快適であるなどということではなく、不便が多いことの中からこそ美は生まれてくる。ここが芸術の面白いところである。

では便利で快適な科学文明というものはどういうものかと考えていくと、いつでも新しく、より効率がよく、僕たちの手や足に代わって便利で快適な暮らしを作ってくれるものである。文明の力とはこのように素晴らしいものである。では⑨文明に対して文化とはどういうものかというところ、困ったことに文化と文明は全く反対の性格を持っているのである。つまり、いつでもより古く、より深く、従って効率はより悪く、不便や我慢がいっぱいある。でもそれを知恵と工夫で乗り越えていくから人間は賢くもなる。心が豊かにもなる。これが文化である。この文明と文化が常に共存しているということが大切だ。便利であるということの素晴らしさと、不便であるということの素晴らしさ。効率が良いということの幸福と、効率が悪いということの幸福が共にある。これが大事なことである。効率が良い方がいいではないか、古いものよりも新しいものの方がいいではないか、と僕たちは考えるかもしれないが、実はそれが間違っているのだ。

例えば、僕たち人間という存在を考えてみよう。人間の面白いところは「前」と「後ろ」があるところである。目がついている方、鼻がついている方、口がついている方が前である。耳は横についているが、なぜか耳たぶがついていて前からの音だけを聴く。人間は丸い世界の中に生きていく生き物のはずなのに、前しか見ることのできない、前を向いてしか喋ることのできない、前からくる匂いしか嗅ぐことができない、前からくる音しか聞くことができない存在である。全能の神からすればいぶん不便な形に人間を作られたものである。後ろには排泄のための器官しかない。不思議だ。でも⑩それにはきつと意味がある。

その意味を考えてみると、僕たちは前を向いた世界の半分としか向き合えず、その世界の半分について一所懸命、目や鼻や耳や口の力を用いて観察したり理解したりする。そして理解をすれば、この世界に対する優しさを身につけることができる。だが、後ろにも目や鼻や口があったら、もっと優しくなれるかもしれないというのは間違っている。語りかけられない後ろ、聞こえない後ろ、それは観察することはできないが想像することはできる。どんなものがあるんだろう、どういう声を発しているのだろう、どういう匂いを発しているのだろうと、僕たちは一所懸命想像する。その想像することがまた優しさを生む。

映画の中では俳優は鼻や口や相手から聞こえる耳を一所懸命使って、エンジンをする。しかし、名優は後ろ姿でエンジンを回す。目も鼻も口も何も無い後ろ姿で、後ろ姿を見るとなぜか僕たちはその人の優しさや悲しさや喜び、願いや夢を見ることが出来る。つまり、後ろ姿からはその人物の心を感じることが出来る。僕たちの想像力がそれを捉えるのである。

(大林宣彦「今僕たちは本当に幸せか」)

問一 ―①「大変なスピード」とは、どのようなスピードですか。解答欄に合わせて答えなさい。

問二 ―②「ダ・ヴィンチともあろう人」とはどのような人ですか。次から選びなさい。

- ア ダ・ヴィンチほど昔に生きていた人
イ ダ・ヴィンチと一緒にいたであろう人
ウ ダ・ヴィンチほど多才で想像力のある人
エ ダ・ヴィンチのような科学技術を持った人

問三 ―③「人間はその時代から逃れることができない」とはどのようなことですか。次から選びなさい。

- ア 現代の人間は過去の時代の人間を理解することができない。
イ 人間は同時代を共に生きる人々と考えを合わせずにはいられない。
ウ 次の時代に何が起きるかを予測することは人間にはできない。
エ 人間は実際に生きている時代の感覚でしか物事をとらえられない。

問四 ―④とありますが、

- 1 今の時代のどのような点が不幸をもたらすと筆者は考えるのですか。五字以内で解答欄に合わせて答えなさい。
2 「不幸な暮らし」とはどのようなことですか。映画を作るときの場合で説明しなさい。

問五 ―⑤「人間がロボットに、更にいえば科学の奴隷になっていく」とはどういうことですか。次から選びなさい。

- ア 人間がコンピュータを便利に使うのではなく、便利なコンピュータを作り出すために力を消費するということ。
イ 科学技術で便利で効率良く作業ができるようになったために、労働量が増えてしまうということ。
ウ 科学技術によって可能なことが増えるばかりで、人間がいかに効率良く使うかに頭を悩ませているということ。
エ 効率の良い科学技術に夢になって、人間がコンピュータを使っただけしか仕事をしないということ。

問六 空欄A・Bにあてはまる言葉を次から選びなさい。

- ア 時代 イ 過去 ウ 現代
エ 未来 オ 永遠 カ 来世
ア 進歩させる イ 破壊する ウ 開拓する
エ 変化させる オ 制御する

問七 空欄⑥に入る言葉を次から選びなさい。

- ア 進歩させる イ 破壊する ウ 開拓する
エ 変化させる オ 制御する
問八 ―⑦「それ」は何を指していますか。十～二十字で書きなさい。

問九 ―⑧「この橋もダ・ヴィンチと同じ考えを持っている」とありますが、なぜ同じ考えといえるのですか。次から選びなさい。

- ア この橋も便利快適に流されないとともに良さがあるから。
イ この橋も作られた時代の最新技術を取り入れたものであるから。
ウ この橋も時間をむだにしない素晴らしい橋を持っているから。
エ この橋も未来の人間の幸福を予感させているから。

問十 ―⑨「文明に対して文化とはどういうものか」とありますが、筆者の考えに基づいて、「文明」の性格にあたるものにA、「文化」の性格にあたるものをBとして、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 便利であることの素晴らしい
2 効率が悪いということの幸福
3 古いものよりも新しいものの方がいい

問十一 ―⑩「それにはきつと意味がある」とはどのようなことを言っているのですか。解答欄の書き出しに続けて説明しなさい。ただし「不便」という言葉を用いること。

問十二 筆者は、芸術にはどのような働きがあると考えていますか。文章全体を読んで、最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 便利快適に流されていく将来に思いをめぐらせ、それがもたらす結果に気づかせる働き。
イ 科学の奴隷になることから人間を救い出し、思いやりをもって世界をとらえられるようにする働き。
ウ 効率の良い時代によって生み出されたゆとりを、心豊かに生きるために用いるよう導いてくれる働き。
エ 前を向いた世界の半分にとらわれている人間を解放し、より自由な感受性をはぐくむ働き。

問十三 a・cのカタカナを漢字に直して書きなさい。

- a セツチャク b リキ c エンギ

―― 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

昼間、私は子ども用の椅子に座り、ひとりぼっちでぼう々とテレビを見ていた。姉は学校に行つて、いなかった。母は隣の家に行つていた。その間、そこにいるようにと、テレビが点けてあったのだと思う。教育チャンネルで、理科の番組らしかった。

暗い広がり、小さな白いものが、点々と散らばっている図が出ていた。宇宙とは、こんなふうになっています、と云うことだ。中央に、ひときわ大きな球が浮いていた。それが地球だと言う。

「ええっ？」

と、①私は椅子から転げ落ちそうになった。

地球が丸いというのは、何かで聞いて知っていた。私たちはその表面に、ちょうどaジシヤクに吸いついた針のように、くつついているということも。

だから、今が「夜の図」と言うなら、うなずけるのだ。
が、昼も夜も、宇宙は、そういう姿をしているらしい。

私の胸は、②疑問でいっぱいになった。

縁側に走り出て、空をおおぐ。頭上に広がる空は、どこまでも明るく、どこまでも白い。(A)、今しがた見た絵では、地球のふちぎりぎりまで、まっ黒に塗り込められていた。

空の上の方に行くと、黒くなるのだろうか。ならばなぜ、透けてみえないのか。クレヨンだって、黒の上に白を塗り重ねれば、どうしても灰色になる。

どこかに、灰色、黒へと移り変わる**ソウ**のようなものがあるはずだ。はるか上に、目を凝らす。

何もない。頭上には、とらえどころのない星の空が広がるばかり。

③それは、私にとって、目で見えるもの、さわれるものを超えた、想像の外の世界だった。

(B)、人は④もの心ついてしばらくしてから、山に生まれ
た子なら「あの山の向こうは、どうなっているのか」と、川べりに
育った子なら「この川の先はどこへ通じているのだろう」と、遊び
の手を止め、考える瞬間が来るのだろう。なじみの石や土や木々か
ら、自分がふいに(⑤)のようになり、その外の世界へと、体
はそこに置いたまま、⑥気持ちだけさまよい出る瞬間が。

私はたまたま見ていたテレビをきつかけに、⑦山や川をすつとば
し、宇宙のはしを覗き見た。

それは、私の頭でとらえられる範囲を超えていた。だから、それ
以上、突き詰めることはしなかった。

けれども、クレヨンを動かしているとき、せつせと粘土をこねて
いるとき、地球のまわりを黒々と塗りつぶしていたあの闇が、すぐ
後ろまで迫ってきているように感じる。

ひとりではなく、姉と並んで折り紙を切っていたり、母と向き合い、
エンドウ豆のさやをとったりしているときも、⑧そうだった。背中
の後ろがすうと消え、そこには筆筒も墨もなく、ただ果てしない
暗がり広がっている気がして、振り向けない。

あの闇は、たとえ仲のよい人といっしょにいても、私たちを常に
とり囲んでいる。その事実だけは、どうしようもない。

もうひとつ、こんなできごともあった。七夕の日で、姉と私は、
母がもらってきた(⑨)を前に、飾り作りに熱中していた。輪飾
りができたら、短冊に願いを書くことにした。

「私は、ウサギが**カ**いたいな」と姉。

「私は、リスのほうがいいかな」と私。

そのとき、ふと考えた。

姉も私も、同じ「私」という言葉を使っている。

けれども、「私」がさし示すものは、全然違う。

考えれば考えるほど、違和感にとらわれた。むしろ、なぜ、今ま
で気づかずにいたのだろうと思つた。姉の「私」と私の「私」は、
同じになることは、ありえない。

こんなに近くにいるというのに、姉の「私」は姉の中、私の「私」
は私の中にいて、けつして入れ替わることとはできない。⑩姉の目
の内側からは、このいっしょに遊んでいる場所も、私が見ているよう
には見えないのだ。

しかも、私は、

(この人に入ろう)

と決めた瞬間があつたのではない。気がついたときはすでに、私
の「私」は私の中に入っていた。自分では知らないうちにそうなっ
て、一生、出られないのだとは。

『いばら姫』に出てきた塔を思い出す。城のひときわ高いところ
にそびえ立つ、石の尖塔。

中に入れられたら、世界は、壁にうがたれた小さな窓から見
るほかない。「私」とは、ひとりだけしか入れない塔のてっぺんに迷
込み、階段をはずされたようなものである。他の人に昇つてきても
らうことも、降りていくこともできない。ひとりきりだ。

それから私の考えは、生まれる前のことに移つていった。「私」
は私に入る前にも、誰かの中に、いたことがあるのだろうか。死
んでその人の体を出て、私の体に入ったのか。

ひとつづきの「私」でありながら、前の代のことを、まるつきり
覚えていないことに、愕然とする。その人にだって、お父さんお母
さんがいただろう。思い出もあれば、別れるときはつらかっただろ
うし、死ぬときには、それこそ死ぬほど痛かったり苦しかったりし
たはずだ。そんなことも、人は忘れてしまうものなのか。

『がんくつ王』『鉄仮面』などで、非業の死をとげた登場人物た
ちを思い出した。「私」は、彼らのうちの誰かでなかったとは限ら
ない。なのに、死ぬときの苦痛はおろか、家族のことや、命を奪わ
れるという、人にとって最大の悔しさ、**dムネン**さえも、少しも記
憶していないとは。

また、私が死んだあとも、「私」はどこかの誰かになることもあ
りうる。そのとき、どこの国のどんな子に生まれ、どのような運命
(⑪)のか、私には、どうすることもできないのだ。

せつかく飾りを作ったのに、内心もう、七夕どころではなくなっ
てしまった。が、いきなり、⑫そんな深刻な問題で、おり姫やひこ
星に救いを求めるのも、⑬すじ違いのような気がしたので、短冊に
は予定どおり、リスをかいきたいという「子どもらしい」願いを書く
ことにし、その代わり、夜ごと、天に祈つた。

(どうか、私を生まれ変わらせないでください。私はもう、この
私でおしまいで、じゅうぶんです。次の代のことまで考えて、胸を
痛めたくないのです。私は私⑭「代」きりの心配をしていたのです)
「代」という言葉は、そのときの私にはなかったけれど、そうし
た祈りを、布団の中で、何ものかにささげずにはいられなかった。

(岸本葉子『本だから、できること』)

問一 ―①「私は椅子から転げ落ちそうになった」とありますが、この時の筆者の気持ちとして最も適切なものを次から選びなさい。

ア 恐れ イ 驚き ウ 落胆 エ 歓喜

問二 ―②「疑問」とありますが、筆者はどのようなことを疑問に感じたのですか。次から選びなさい。

ア 地球が宇宙の真ん中にあること
イ 地球が宇宙の中に浮かんでいること
ウ 地球の周りの宇宙が昼でも暗いこと
エ 地球のふちぎりぎりまで宇宙があること

問三 (A)・(B)にあてはまる語を次から選びなさい。

ア もし イ まるで ウ おそらく
エ だから オ さらに カ けれど

問四 ―③「それ」とは何を指しますか。漢字二字で書きなさい。

問五 ―④とありますが、「もの心つく」とはどのような年頃になることか、最も適切なものを次から選びなさい。

ア 他人のものと自分のものの区別がつくようになる
イ 大人びて社会の規則をだいたい守れるようになる
ウ 自分の好きなものに自然にこだわるようになる
エ 世の中のものごとが何となくわかるようになる

問六 (⑤)にあてはまる語を次から選びなさい。

ア よそのもの イ ほんもの ウ にせもの
エ けだもの オ わがもの

問七 ―⑥「気持ちだけさまよい出る瞬間」とはどのような瞬間のことですか。次から選びなさい。

ア 心が解放され、自分が誰だかわからなくなる戸惑いを感じる瞬間
イ 狭い世界で生きていることに不満を持ち、自分の無知に動揺する瞬間
ウ 大地の限らない広がりを感じ、世界の連続性を感じる瞬間

エ 遠く広がる世界を感じ、自分の限界に挑戦してみようとする瞬間

オ 自分の知らないことがあると気づき、未知の世界に興味を持つ瞬間

問八 ―⑦「山や川をすつとばし」とはどのようなことですか。次から選びなさい。

ア 目の前にある山や川が目に入らなくなつて
イ 身近にある山や川のことを考えをしない
ウ 親しみのある山や川の向こうまで走りぬけ
エ 目に見える山や川は当たり前すぎて考える必要もなく

問九 ―⑧とありますが、「そう」の指している内容をぬき出し、はじめと終わりの五字を書きなさい。

問十 (⑨)にふさわしい植物の名前をひらがなで書きなさい。

問十一 ―⑩とありますが、この時の私の気持ちに最も近いものを次から選びなさい。

ア 姉との好みの違いに、越えることのできない壁を感じて孤独になっている。

イ 姉の視点が自分と同じではないことを知り、なぜやりな気持ちになっっている。

ウ 姉とは永遠に心が通い合わないような気がして、悲しくなっている。

エ 姉が自分とは異なる人間であることに気づき、落ち着かなくなっている。

問十二 (⑪)にあてはまる語を次から選びなさい。

ア にすすむ イ 向かう
ウ をめぐる エ をたどる

問十三 ―⑫「そんな深刻な問題」とはどういう問題ですか。ふさわしくないものを次から選びなさい。

ア 「私」が私に入ったのはみずから選んだことではないのに、他の誰かに変わることできない、という問題

イ 「私」が私の生まれる前に入っていた人について、何も覚えていないという問題

ウ 「私」は『がんくつ王』や『鉄仮面』の中で非業の死をとげた人だったかもしれない、という問題

エ 私が死んだあと、「私」が誰に入るかは、私の力ではどうすることもできない、という問題

問十四 ―⑬「すじ違い」の意味を次から選びなさい。

ア 相手を信用できないこと
イ 見当がはずれていること
ウ 話の流れに合わないこと
エ 思い違いをしていること

問十五 ―⑭「二代」の「代」のように、次の()にももの数え方を表す漢字を書きなさい。

(1) 玄関に() 見知らぬくつが置かれていた。

(2) 私あてに手紙が二() 届いている。

(3) 学校ではウサギを三() 育てている。

問十六 この文章の二つの出来事に共通していることは何ですか。次から選びなさい。

ア たとえ家族であっても、自分の考えていることを打ち明けることはできないという経験をしたこと。

イ 「私」の知らない世界が外に広がっていることに気づき、今までのことが幼く感じられるようになったこと。

ウ 無限に広がる空間・時間の中で、「私」という限られた存在のありようについて考えるようになったこと。

エ 自分の力で動かすことのできない問題に直面し、それを見ないように自分自身をごまかしていたこと。

問十七 a and のカタカナの言葉を漢字に直して書きなさい。

解答用紙（国語） 受験番号

氏名

句読点は字数に入れること。

（ ）の人々にとって

馬に乗ることは（ ）スピードである。

点

問一	問二	問三	問四	1						
----	----	----	----	---	--	--	--	--	--	--

問四	2									
----	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問五	問六	A	B	問七						
----	----	---	---	----	--	--	--	--	--	--

人間の目や鼻や耳や口が

問八										
----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

10

問九	問十	1	2	3						
----	----	---	---	---	--	--	--	--	--	--

問十一										
-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問十二										
-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問十三	a	b	c							
-----	---	---	---	--	--	--	--	--	--	--

二

問一	問二	問三	A	B	問四	問五	問六	
問七	問八							
問九	はじめ			終わり		問十		
問十一	問十二	問十三	問十四					
問十五	1	2	3	問十六				
問十七	a	b	c	いたい	d			